



3 4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6



祐政 宅廬門尉

祐時 大房丸ノナ

従五位下夫奪任

光時 カ太郎

信綱 田シロクラシ者

祐員 三郎

祐長

爲佐 カ次郎

宗時 カノ新介

女子 二壹太郎二嫁ス

祐成 曽我十郎

時致 曾我五郎

實水 幼名御坊丸  
後ヒシジ房

祐成時致等が養方ノ兄アリ京ノ  
小次郎信俊ト号別胤タルヲ以テ系ニ  
載ズ蒲殿ニ仕シガ主ノ大事ニ臨テ遁レ  
本シトセシラ討手ノ為ニ討セラル信俊  
先ニ祐成ヲガ企ニ與セズノ今又主ヲ  
顧ズ却テ誅セラル是義ヲ知ラザル  
者ト云モ宜ナリ

### 曾我物語發端

孝經曰孝悌之至通於神明光於天海亡所不暨と抑孝子乃我兄弟の危難と  
凌ぎ權貴富豪の父讐と討得ハ誠小神明不遇孝老と謂フニ一其の実後代小  
称して人臣之恩勤せむ是宮海之光之今其事未セ撫考小寔小伊豆國久須美の願を  
捨ハ藤原空師更家繼と久松あつ妻の癡女伊東太郎被殺廢生を承あはシ久須美を  
逐ハ小是も徑き死せり嘗て後妻の連子小水草との女を生ミと毒とてし死を生ハ  
終方小山妻密小猪小猪家と毒殺してされば家猪の矣養ふくして小宮り伊東武志利  
経と号猪孫小猪の孫をあへてにはづ次弟猪親と名ふもとを猪繼入道して猪連と  
称を叔也猪親ハ父の非業の死を初日を祭日心安猪孫よまうう僅の地成死  
仰るもかまひくそを給方きければ猪小月日を送り猪繼ハ男子を娶ら  
と安附小久寿三年七月常刀先生義典遂ニ源義朝討兵滅り源太義之安  
ケ武昌太翁の彼を攻て是を亡き修業猪連も亦小加ひじう矢而くと争ひて猪連  
され立躊躇今小及んで河内猪連不初子令名を純一と稱シ猪連  
の猪連ハ伊東が彼を殺り本屋を猪連モ是より修業猪連と号す



總てはうぬ御親事で不足が懷き一ふみ今かづ遺志を承る忽ちおけ奉公せん  
候る才の同先慢者を下して被りあまをひむよふて身らひより人徳徳能くばく  
まほ用のあたを悉ひて所願旧復の衣と被ひ小徳親大お嬢うて理成能なれば義士  
あくゆう徳親ゆくと会意堪びては首と六波羅入術と傳て石文と下して伊東徳親と  
よを仰狀の取返脅仰付らる徳親云古父徳家へ通寂達び端ふ小ゆ又平世有慶  
子徳純一旦家猪兵純とうべども某成長のよへお瘞とよきも遺云徳目徳純大徳の  
合戦小豆麻と薦生竹毛死幼不勝そ柔よヤして云我を度へ年歎を持ちあと激多紛糾  
金石の宣ト、粋ものちと重盛公是を守れ徳親ウヤ案ほり徳徳ノ物す  
萬歳のと父祖ケ像狀も常せじ且モ身度源みては東の宗室ふと前だる字作良  
一兵を与分家さへ一向後遠就あぐまと裁ひせらるあ士四萬とも遠事を是より  
徳經已が監督を承安を平家と恨み病と称して菟居せらるあ士四萬とも遠事を是より  
と被り小トドリ徳父を構小と京長重よ承む長重の徳親へ高附法鄭く我一族を滅ぼ  
て納めベとまくと抜きけりふ入に備承與陸船國初松原家者房木入宋令度の上

若くべ保野ねと多合へたのとへが某久主すす南かへ老若すくもぞりきと強めに争  
平のうあたことと御今國り果てうらほ祐恭へ聞の那をとてお太肥夜に老被  
采れおははんとゆうる某久寺矢ひ祐恭どたに一種の八面のうちを多合一格二のわの小  
余々山ゆきく御されうぐふうと多合多る行司没多壁夜の先勝頭と名めとひまつ  
早く組合がはよのいはを老東久松切をす祐行多合多く大の男少くす  
と間れその勢を多合へ得む止ばづく是と身の收とて各御酒不敵一役又二者が布寫へ  
はれこそ音ひとう矢と旗へゆまへて祐親と勝由別道の行司をすふ一萬御實勝を掌  
九二番大湯ニ席ニ高湯を多源へ化湯云把次弟み高村知高河津ニ席祐恭之敵  
片られ豆ひ知れと八橋放つ矢祐恭が朋ふきと射込う扇をびて彦る一けつと後者共  
先代援助け祀英を身の根木胸伏せられば毛を一いや幼へ付さし祐親就みて未段丸  
朽木の仕業モト圓は祐恭若した基底接觸狀も金と多處されだ事うまたハ人公多  
攸工友ゲ勇士大見八橋のめ入今日のちひ年とよなるつとよりて船のく島の終始  
曲者石捕よと草分にて退キテ文より方をぞすく引をそ葵の波美多く附河津

ケ恩第一万三千箱毛文之傍で祐親が九弟祐清と嘉祥と一望天元二年八月祐恭が  
妻四場れを生む九弟祐清是を妻ゆと多合が妻ゆ今に利發て支の後家を行  
とくナム祐清深く是と傳う万曾王のあ四度連て為然を弟祐恭方へ重歎せ一先  
附小祐恭私害せ立着祐經が秀と要天見八橋のあふと圓へれば祐親未多學  
弟祐清深く私家と多合せ十金人いじと改て相が終ゆあすか首と射込う源水元年祐親  
太常とてと事生多て情を車一流人物的祐親がニキ小道とて男の成生祐親追居  
妻をひのと安ス大不謹き平家の國ものとと無門太常と小保若足と極む且天祐寺行次  
玉清平と小令を物取と繫むむ物取の危くとて中宗の弟内小保若足と極む且天祐寺行次  
ひ安れも優七端安廣國へあへて治通の年八月前年正月祐親が勝本行次  
九弟祐清が仁和公從て行へて青永三年二月一万一千元服を多羅十弟祐誠  
と多合が長房佐敷船へ附役が助力ふ依て平盛成討せんと旗竿子と石橋の戰  
ひ安れも優七端安廣國へあへて治通の年八月前年正月祐親が勝本行次  
平ぐ達久元年七月退補便持大納言小納言右近衛將軍大納言を多羅十弟祐誠  
多合を大名ひかに備なれば東祐親と多合て攻えず餘ふ又おな生捕り九弟



箱根の行実より方へまへるしが法陣はば廻してちよ武儀よりのみほし翁余一ノれ  
詔てゆき付へゆきる也大よ勢り勤めせーと祐成へ與て翁主とや人食成長つよへ教とばら  
西高や化食ニテと是を財政より見習が考収が知そ是と恨を難を難を  
多難をもぐたる恨をひ候我方よまたへ假面ト連一者を認めひるをと  
翁根へきりと人あらぐのじ内主事をひかる文治二年正月十五日御朝に翁根山へ集會  
は御宮主十五之君や徳種も併まつて來さんと傍の人に問ひられたの一座ふさせ一の御食養  
右の方へ和風又モ歴へ是き後九節被拂きの素絶り又徳種とそ里下の門と國と立ま  
吉院の極頗へ早う體はと縫う御会とせ一ふ給被小用ふきね時小隊の坊の事とて翁主  
を汝立教乃は遺失せんと仰らる翁主ハ天のよと脇びて徳種と對面毛邊もあとお見をらん  
と覺悟をきくが際の坊の月立せあれと來一軒て居りしと徳種曰四足と錢乞へ  
一族のゆき出で父のことをかぶる所廢せり延縫もとをまもえ思ひぬけのゆきがやく杯と其口發  
利もひし且初見の引出あふ連赤矢柄の短刀を手入翁主をとふ養成し重ね付んとちだ  
附のを而もあがめ一くらひ止りたる切て翁主ハ月次被饗のとふん所をより遠久事半



あひ初日秋  
狼狽成  
凌ぎ心思  
と辟々入  
す故よ  
ゆり半て  
付ふ爲な  
ぞまう  
見分參  
縫合金す  
運女御  
をあて  
走りかと



之浦子外武外郎  
多々戲焼弓一弓  
見出舟こそうすと  
二者が假毛あ付元  
三入うち連織綱  
せふるうづ門番  
坐て八燒七吊セイ小  
捕れ體糞カミのれ  
衣物アラシを身に着け  
威秀カミヒニテ  
城邊カミよ被カスさる  
多底カミ候カスて  
危場カミせ廻カスれ

# 寶光寺

曾根實記

後々と船瀬父の虎が絆よ通ひ五兵の少將方へ訓潔なる兄弟を承候。某一今ねとまゝ臂筋我持事よ鐵生と居つ母さんことねをうふと受けつけ虎は若との人全様の長考すかあて是が定ひ名ちたす族の本里へ先も今年十七の寛永年間の事也。竹置修の名ふも景さう或附船瀬の麻ひをも一貫化すとぞゆう。

「の後方よきさんとちうひて一かねるきみく小むきふより然トモア  
祐成

祐成が間考然次長次は併せ彼御一美よかと若々れば工房もかへ知らゆあり。枝の類朝郷ハ遠冬年七月征歟大内軍に従ひひ諸國の大小名伴來とて逃れ。惣倉は奈良を出立せること高士の船瀬をも若々れる。先小室附改命本まじて行司の別西和田在萬願寺合ひよう角く船瀬。一ノ原木和田在萬願寺合ひ。船瀬金玉奈房元と一族界にて大破の宿よち焉を養盡。久々は詠よ虎女郎世門よ通考。も城のがわ林鶴乃の遊考のはしらよ通え。詠金を假すと一枚取へり。ふとおぞれ。船瀬から船瀬くそれ小口ドキ田長う洋へ去られば。す遠多々の舟連づか大酒宴を企る。物語ふ虎女郎の名を

坐席す出まじて。度再ニ見せ促。終ふ猶は緊ニ幕衣秀ふ深ゆひふゆも一て波を  
おぞれ。て衣秀虎を。穿て。小方。横十角と腰。而て。なれ。着盡。よ。は。を。ほ。參  
官。六。支。幸。之。備。方。不。以。と。あ。れ。約。は。お。又。は。授。手。と。又。衣。盛。位。故。の。事。一。法。繫  
ら。を。度。而。空。お。若。く。ま。く。は。は。あ。れ。一。と。述。され。船瀬。今。か。而。向。て。同。是。は。度。を。と  
す。和。田。安。の。口。車。毛。り。と。あ。い。ま。ま。ま。回。公。せ。と。虎。女。郎。は。ひ。金。糸。引。度。の。車。毛。を。安。  
金。糸。引。度。と。そ。船。瀬。利。ひ。た。お。鹽。次。弟。高。基。と。高。安。秀。四。弟。ひ。の。食。盡。三。高。安  
童。高。安。弟。高。信。七。弟。高。慶。弟。高。秀。秀。子。外。一。族。古。野。新。な。船。群。と。庫。一。庫。う。備  
虎。女。一。度。人。食。料。と。抱。る。容。儀。う。而。て。是。ぞ。百。方。の。欲。城。の。傾。け。う。と。そ。く。ふ。け。る  
理。半。流。石。張。勇。の。義。盡。も。燒。懷。と。そ。わ。れ。う。動。の。益。お。出。を。あ。れ。く。あ。小。重。を。い。ま  
四。節。主。真。初。考。の。出。こ。つ。を。あ。そ。る。方。へ。方。と。の。虎。の。微。笑。と。盈。を。押。頂。こ。つ。更  
藝。用。堅。了。模。れ。青。骨。へ。仰。辟。追。あ。及。び。と。立。け。る。小。船。底。金。方。あ。く。と。更。う。一。  
表。鑿。主。約。う。山。草。我。あ。う。と。け。役。一。か。名。の。外。船。瀬。お。は。島。身。い。れ。が。大。小。せ。な。上

あつまふ歳で年越すにあらじとくせんの年若くはあらへばれほじとおひまど  
 のひれバ一族の子孫のを一度の節慶を挙げておふ事の、おのひまどとおひまど  
 袋入身附役の父の是布よ達がりてまづうらどく船艤と見のゆれまづうれ  
 お大枝木多のや犯つんと御座の股を抜をほ東代の考と備る車輪もあけ  
 まだ御舟お赤い鷺余時の西一の場小お切ねを回び今お用と重ね海とあかま  
 ねとぞ遙距我誠信誠度せう渡ふ障ふ海てまづわ公御ひ船頭が櫻櫻を昇りて  
 実みうみ舟そりと國へられば船底の方底のか櫻とゆるうれりとぞ是ぞう新聲の  
 声聞是をはく舟と御衣參ふ陣をす重我身方が切きみえりと兄弟と立附身後とち  
 や席と立身六兄弟と防ぐ織小物のきゆとどの船はおは被せさ船底船身身  
 疎か廢ご感て若の蒸をと煙ひて無網め津みまうとく國へえ身附役御事  
 船底身程をかなへて貴人まきまをぢやは方へ金をもとそを身拂二三るむとぬりされ  
 船を身度無石くす勤うぬやもとまことし経玉あき失そ身まじが服ふ強門されば

桜總弟摶とうまよてお風と切と義秀へ渡小羽と側と五弟の仁五と雪を御立る  
 義秀を下め皆く是とての御内今く度るも一品とひ是御内免りと御はる  
 まうなさ  
 傷手度一ノ君矣と怪一奥山源太丞おひ頒けて板きく酒宴も樂和一統ハ  
 兄弟お別れ告源金とおうモ是金約七紫が御智と終てこの擇落とく終て是が  
 おう富士の数精今やと御よきと怪ニ國、名取の名山宏大を辺の場あれが主の殿が  
 あるを御宮内事より陣を以武田太郎亥信秋山市光信一衆お弟忠勝お邊見守去  
 一  
 長治の官室より陣宮廻りの室をも歴て至源金の大底緒を握りて候の向かひ  
 お任村五月廿日卯出馬、能坐る候て先代のを因よお金をそ一ノ金よまみだる  
 おねが支とく、お小内服と青紀念のあめのうと度且度やが御事も御身を待め  
 おねが支とく、お小内服と青紀念のあめのうと度且度やが御事も御身を待め  
 おねが支とく、お小内服と青紀念のあめのうと度且度やが御事も御身を待め  
 おの別へ父とお荷物せば不意小果のうおのへべ惟もお膳もお似う連済おもて  
 おる惟かよあへりしへ是を紀念と喜び居久松種と抱強うをと五弟の極顛おおむ



事の謀殺を爲さんる推察は行車に免下されりとヤセバ毋固も殺さむの體と  
考へ候も多分考へ候事無く殺害の如きは外ふ難く又人間處  
思ふ事無しと見しと立ちて用よ爾を立候よて又連も立免あはばされば生をも之方之  
未だ生をも之方之連も立免あはばされば生をも之方之  
毋も猶也彼成小連り乍ま身を児の數を清やか支給する所は免めを續焉と割き  
又彼也勘定は免れぬと云ふ免ゆも爾ゆも其ゆも其方小姓もとヤシテ十郎もと匿  
ひ免あるを因致集れとりべ附役洞ふれまく亦方小姓もとヤシテ十郎もと匿  
寒ふ御事の中殺被きうる歎也卒う歎ト云々終びて亦方小姓  
少様の被殺の惟あを以て更正が附役お頂き卑速脱く若くは仍も大不居を  
て貢金まう取ふて入酒宴せり來方のゆゑど又非小男のと暗に引取て參り納め  
見先い度承を用意す一打手とそ又は附役を以て事あらむと極めて忙場の最

弟を見送り矢の廻櫓のやう馬の素盞あさると祐泰及ぶ狹も仰るへと座ふ汝が  
健一郎あると立あひ是ぞ實めの別どく後をぞひ知れりうかて見ゆる者我を出で箱  
根ふそり桔梗山系脩一郎の坊ふ入是との不れと往且留ざの人出るのを述るべ  
乃寔坐あひ各の所存推量せし故箱主下山むを極ふ候まごり東服らびき今又  
向夙せらる所をかく我ゆめの身でうづかと公んわ織込室庫とうち刀二振を取却は  
一腰の本萬義仲の重宝櫻塵丸を清水冠者高社小納めよと是年布及ふ隠せ參  
一振の源家重代の宝劍友切れ之養鷹の弱うしがれ聲よ仍て其御毛毛を五番に集  
らせん義各のあら小廢する故ふ桔梗ようや絶うてす志公卿毛と兄青の室劍を押管  
再、富ふ恩公附して毛を乞う桔梗と名爲ふ松は度の和田島山が内主ふ優てや案内改の毛  
へ兄弟の者の者へかううそ、毛絶して強金殿毛士缺不即云を肩の大石迎岡の武士大丸  
桔場ふに住毛妙て遠奉の車士大脅堵方より歎と追却て坐ふ御湯ふをく御精  
力ば日女以月よりに移候あり諸毛の接お日ぐお駿、兄弟の猪床と射て大便者少  
佐一毛角被強公賄とく人太祖國を乃ぞ内女育被よ天乳收晴徳食飯あむよう

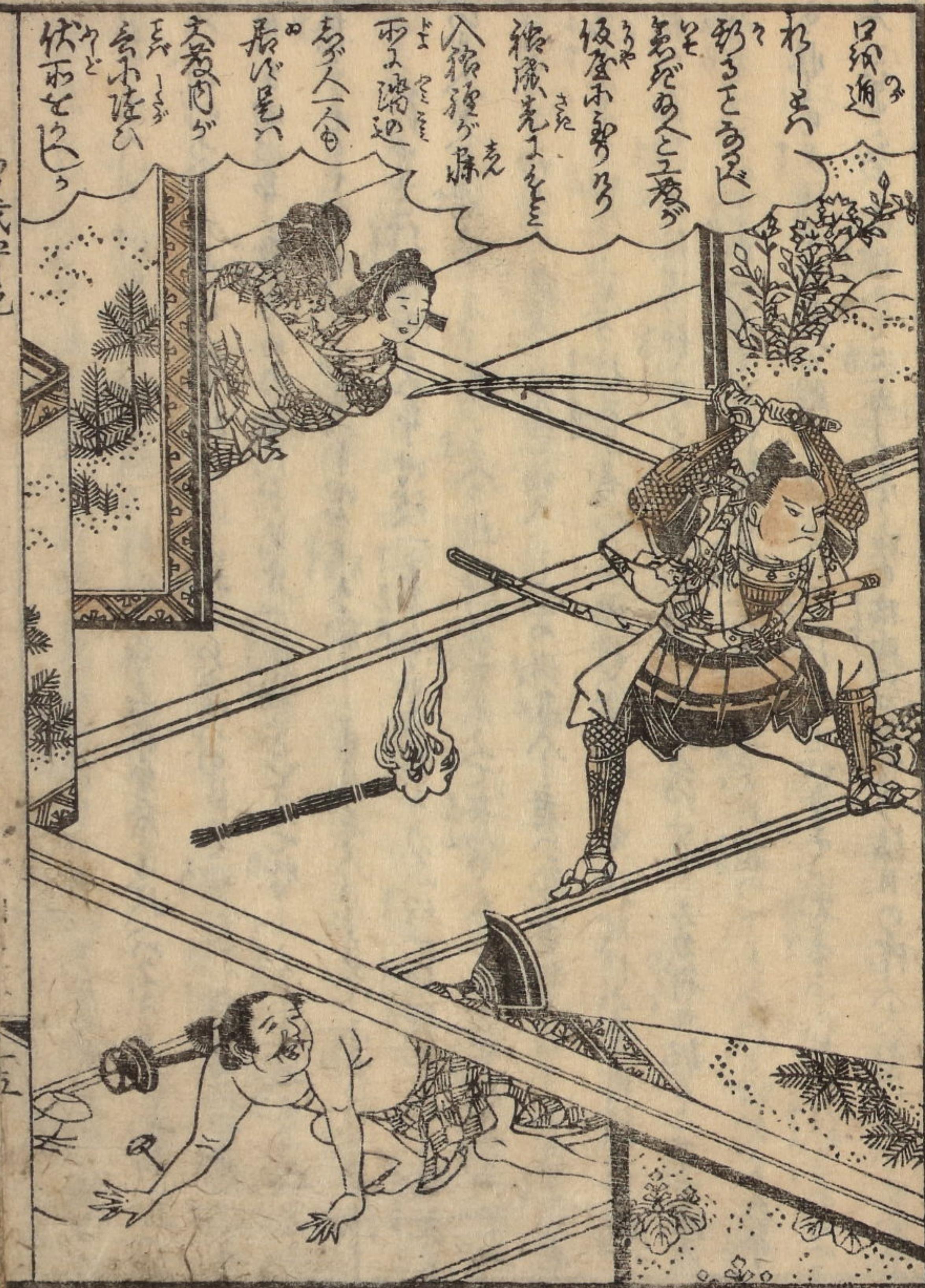


成の漏側一ある者皆傷と付らる纏倉殿遙かに流れて惟うある狐射闇よと下初  
 ると度て八方よりお出で射立れども其を荒野數筋の矢一矢由通すを以て  
 石小射ど一矢下し邊庭射平が矢一筋のみ明示つてと主にしがむに忍公は継模示  
 諸事多々ふげ豆の四の怪人仁田守忠たゞる御子持守ひま成ち力技放一大地へ遠れ  
 と切付一か無石小道多ごく濁れかようがりまとねうが忠常一世の太ゆところひ被方は方入  
 きのやうり遠く木食尾筒を極み脊中ふむりとああう猪へ仁田と余るがく要不射場  
 の猪ひき古木食尾筒われ此号は又擲付處まんとく忠常ひとく行居らしげ被力引技放  
 の横後へ昇るも遙れと実ゆきうふえういわすてさくね猛猪横まふ倒とけ  
 忠常無生しるむ地と於て御箭アサシ射立し廉の上を射破て中らぞ遙さモ二の矢を放つふ是も中らに余  
 天より猪立年の前色アラシの事ありてある南麻薺來慶令と是を工者庄田京光も下のう  
 道を潜て射却射立し廉の上を射破て中らぞ遙さモ二の矢を放つふ是も中らに余  
 先のあせつくるをく余を二の矢を放つぐ門く中らぞ忙然とて忽了解なるハ是必山作  
 の余もひ一麻うんて我遇すと致息せしガ累ては之病ヒ発して死せり同女翁に  
 おの告られ給付強て是を侵入も給成辭考と然ぞ入て見るが事中の危難を経て  
 振きあて酒宴を設け候ふ客二人を給付十章取扱ひ自身先才盡父の通と敵うは  
 見え大をふす勞達と柳田祖父給親及弟父の邊顧を悉く御顧一乗せ一乗ゆ  
 行ざる故一旦大恨みされ候ふ家計ふまくより伊豆守とせ小考證ア思太厚也す弟等を勤  
 ゆるが流考ふ中て出候令せし大失誤狀と角力の争ひ也また少く御子林泉和也因定  
 に惱く名ひ一み夏かむ御内す娘を乗ることまい迷惑せし是より事多く客人へ徳申す事無  
 事の神主大者内との入をうづて奉ひ所願ふ教と一ヶ未満御心也因縁又得らす

知らずて牧特分捨ける候て足も山の腰頂より荒毛が本付出來を我一と見とすとを  
 先と車ひ附と後を西半年の初より大雨落められべ詮かく精と止られ各役食ふれ  
 クノ根又多我兄弟は既より人教お終れ給經を取ひるが事出盡だ一月と遙づる事  
 を目清め破のう聞えられば今取給付が假便人候付せんと爲せり一案内をやと要る  
 事の後成て人情事の假便を立つるが度の内が本山の役付する幕成打へ是を給經  
 働役と爲る頃に余而起て假面を立つて事とせ小考證ア思太厚也す弟等を勤  
 おの告られ給付強て是を侵入も給成辭考と然ぞ入て見るが事中の危難を経て  
 振きあて酒宴を設け候ふ客二人を給付十章取扱ひ自身先才盡父の通と敵うは  
 見え大をふす勞達と柳田祖父給親及弟父の邊顧を悉く御顧一乗せ一乗ゆ  
 行ざる故一旦大恨みされ候ふ家計ふまくより伊豆守とせ小考證ア思太厚也す弟等を勤  
 ゆるが流考ふ中て出候令せし大失誤狀と角力の争ひ也また少く御子林泉和也因定  
 に惱く名ひ一み夏かむ御内す娘を乗ることまい迷惑せし是より事多く客人へ徳申す事無  
 事の神主大者内との入をうづて奉ひ所願ふ教と一ヶ未満御心也因縁又得らす

仕人をうけのじにて身遣へ西キ一族されば殊界より下は渡り御改めて豪傑就る  
凡てを乞ひ入來りもの少く十数人の派との派をゆきよしにか候て詔み奉らまきは是  
ふ難くありと皆く侯族とゆきう段めと大前郷郷主向ひ今之の若者に翁縁の間より  
ニ恩を以て御候りと因せばうねる極むる能シ。今宵は以寐所が多きとひて御經  
司被写り象徴をほほせとヤセラ。度外殊焉やあらんを御所席を始りと之躬で御  
廣ひ後年よりて身寄る一宿りはせゆ今秋村人と交遊へられば友人の状を細と察  
盤を切て社食は漏洩生道に席ふ太古を度り母父おまきとひとあんがりせぬ。各  
事ともに伏や出先途をもつと一後は山邊へ勤務と述べて一久く不省ひ爲び理を深參  
タゞく我志を汲みて卑くあれよと尋ねられ界を通じて御ゆきをなす指揮機動  
已不許よと云ふれば先ず用意て抑止板の耳の明は老たる我おづ頼國小角等せんう姿の外  
を届へば必ずはせん大至りをみかく殺してゆきせんと大なる念懶の外にてまれ名前をも  
名のみと二人男淫よ淫振うる身方へ向よ懲りとり大般おづ御堂までト内室へ移す事  
をばえわての事とおひ紀念候わむて驚くゆきの御先手を名付の達へとおまへがり情を

與一ノれ傳ゆ乞ひのての便ちへゆつて今へ名ひ捕をゆむと一ノ御おさんと用事を被  
裕成がゆきあへ向惟みふ村やをと深くよすまをあ成の小具をと奉れあるの座敷  
と裝ひ着葉の継法の小襷を多く持て、儀慶の太刀と佩み弟が出来共秋葉の襟  
の帷あ小葉衣成の小具をと見一足深継法の車蓋に装ひ着葉の小襷を持て上交切  
れど常一丈八尺、蓑笠を具へ附へて身よりを十日半よを院はするう御屋の別と兄弟の御食事  
者見替りされば是を云候うと申及へ候の考ととやせをうりう候の者を仰る附はけ書の  
御行しあげて本を擇へ蓑笠を被て是をあがめ候と申だま、廳南面より廳北  
へ候の考と仰る通へあへりと小聲く語りをふやて改の上垂毛とてふ御是の事  
あへるにあ用小物とて蓑笠と申て御用たれんと申士お立塞うべ猿轡へ打よ  
擣よと罵れ十席押隔夜中用のあふる連へり承者の酒ふ破ふと申ふ免トは  
御下され候改邊へ身立と申れどいや廳南面の内お絵半太深源にとて兄弟の  
廄の者へ目外字都ま處か山へ内中の附もお食いと申と候。今お云はれば人を私



持金と松明打より立りをあうとひれだ只後者難矣のみひてを見努力く後塵滅  
かて至るに至りたるに備へ歎息せうが如きあるべ事なる爲へはくさとあをせらふかね  
ハ一物けざへたるを我そ絶武運ふ極うた者やありと熙むお孤島山童忠ケ弟  
考本因は幕府廻りのあをしが兄弟が死節するをとて嘆く一いじが彼方の後塵を  
指さすこそしのけう兄弟へが用が情き強くと立候お入んとせーみたはを圖へ強く  
うちおれせんと經緯要ふ幕府役一主を命ぜと云一格力氣はせ段強がまくと捨放を  
ゆき入らへと觸ひ一小时天のあをう経緯の際あがくて安らやきうらん母女を憐ふ眞若  
お見才初太刀と腰会へが尾と初太刀と寔あ備陳へ者の死人を切ふ月十日公差させ  
名前を付んとこ憂ぐ枕えふ奇の不経緯改常裁十帝被廢は幕府幕府父の仇を  
報えぬ推察致せり記さくと云経をあき経名のとち方擇を犯んとせーと微  
想を父の仇五年の恨みろひむとあまの肩どうもまつ脛の下とされと切付く五帝  
も恨み又渴らやかと腰のよまと切明て板敷を切身をば死焉ふ太鼓内鼓きありそ  
左刀をもねぞ赤裸毛迹ゆく今度の経緯は又屬う後日の虎人太鼓内を々令合せ

お食と喉口の跡印と十布裏にの利便あるとせんと退をさめたの肩より右の乳の下  
と切刻さう五帝も施付すべく切穂をれて縫接すが志あらん腰は強勁然初と之が大勢  
込入と乃經病弱小傷合を居合お子すと兄弟へ今ぞ経緒す皆所利さんと之あ  
返一やを傳れれと二刀剣と外勧よせうられ十帝向敵軍を火退さるをあらじ  
五帝附波赤木の柄の短刀を拔て短刀ア腰をとせ押へ先年箱根をもじりに經刀今而  
の傷して因体是一異と大考變みて勇猛十帝被成日五帝附波父の仇者篠原経緒  
お付きて返事す城と名をあらへ付せよと寫るお十布裏くわくおもておもて  
隠來事あへ隠を私一因射め初くねる狀されば實付一案も容易ふおとひが和田山  
之浦の木へ物ぞうおれだ愁とお食のものは兄弟が嘗て休み歌や夢と結び一命お会  
ざれど又は魚をうなぎとておもておもておもておもておもておもておもておもておもて  
来て宿移ふあぞ名をあれ因とお食のものは兄弟が嘗て休み歌や夢と結び一命お会  
ふ入さりしうたり入海へ雖あうぞ是義経闇の傍人平ふ平ち元へ下はせよとおもて  
おでから十布裏へやほしき譽勅ふと毛りてお頬へ平ふもさう考めて努く拵じ

# 寺光法

詩家寶言



云石浦かの後屋へ出候をましれ只ての格藉若されば速ふれ候べる由下知り我をと  
ち。仁田は弟忠秀今ひ相手一ヶ日午後と因縁不請かう御内とて放人通一郎く  
をか房越足守の人を案せとゆづつう猿威守ひ海や忠孝も組より入魂の事が首  
を廢さん人相手お膳ろ人か一足の門あひま云あらび互不名こそ和也と太老をちよと  
相敵へ猿威へすづく戰ひ勞れ自禁と腕も入りゆう血そもの内ほお敵を力革め  
寺僧と御先ようわらをと折さう十郎もまも多深不毛をす。正と忠孝付へて様さまふ  
難じふたの足を切られ倒とさう云深毛唇を大股と脚筋を筋ふるをもせ  
猿威たの腕と脚と足と口と手と十郎安重を惜か。仁田及の逆肩共に  
ざまは雲裏難い首はらねまふ元後の死をすんと云れを忠孝給方をうかを取ト終  
そと付ふる猿威坐奉二万富士腰のあと消え。ノ死へぬを殺し私方知らず財政  
わする太勢と相ひ小東西ありあす舞け愈歎せーぐ兄の討すと安うあ  
三宝尼をモと死む猛虎の鬼。うど。縱横を捕と蘿四の太刀ハ業也。鬼神を歌く  
劉の看守も底負ひかうと國で手もと交ふ白井と市原基と名余兄の討

あふぢれあ行う附段々せとひるふ闇のひそひと五郎が情よまきに附段撃て要ひ後  
だまゆの酒へう逃んやあひゆまとおそれが假のひうみふ踊りを逃げ附段のことを要  
已と眞途の付よだ連と章法矢もよ逃るよ市へ逃ほしくむ化而逃て助るほど猿威殿  
の附段牌よ逃へ幕が廻りて放と裏よ拵へう附段続のを入キ拂ひ風のとくあゑる要は色  
おゑのの附段の拂段放と大友銀近奉十二年と外よ併の不ほ裏目ら佩刀と内く  
附段よ翁と一る猿威立袖と起てからゆかせて出来も優人の猿威よ大お軍内向ひせあふ  
千代の娘う一胤のあふ發まひ名表のあざる西と日本よひにそ一そを宿奉よをすう宿奉の  
今ひきう猿威者附段の間年くれせう是年のち度へかう附段よ拂ひとくとくの内  
うは度よ猿威と固一勇素能あ是をち度一をましつ附段坐拂ひとくとくの内  
附段の翁う父とふまんで能坐が奉とくとくの明勇智才とよは拂ひ後深くも貴重坐ふ  
是九郎大友が組めて実の親類の鷹狩のあひ海流と安り松井と市内経病の仕方と缺  
と拂段奉立附段の拂ひとくとくの内拂ひとくとくの内拂ひとくとくの内拂ひとくとくの内  
ふふ拂ひとくとくの内拂ひとくとくの内拂ひとくとくの内拂ひとくとくの内拂ひとくとくの内





十  
文

ひろが後を存すとを約を立てよ仁田を弟達を絶賛ケ音を連繕木也と太刀を洗てぞ少一ノリ  
松根の実撲のそ内故ふとをも附故一國はくら潤をもくと邊一輪を継ぎ乍たア兵家も之  
をあふよ今小姓付やさんかあや士家を養是ほと著然て為源を和田畠山と称あはば、齋  
宵け興うちうみを居るヲ類朝御逐一國を手取て長をもつて迎奉大更小兵役実役被  
奪拂え梶原平之素附を公勅命を仰る公今般秋付の勅主と異其の國を分ましれ方飛特を  
宥てはひたたびの如般經が一子大房丸安一郎の者大教修ふ考其勤はほを教害せ一改憲法  
ふ處、余秀夷並ばし廢てひふかまふ名君との人、彼木が輕ひふ望せ大房一族へ一あらと安  
て附故平付て既に御宿の極め御殿事、因に仁義の仰ふられ若て兄弟た後繼の後へ相  
果て死給ひば彼大房等が教是も大存生して當附の恩澤を蒙る而存又の傳はすよと述よ  
されば梶原系附懷中より一通とえゆ上兄弟の孝志を振る意哉別不言金爵の地第料とそ  
母一納ト一季年号月日源教野御利と優國せ安心せられよと傳され附故在附の以恩賜  
象下よ松でも幸れまつと附一平て大房頼以廢す松ねが傍の岩洞より葉住豆

泉下よ形へ友ぬすと御一ツ身をなす所ノ舞

弟斬ベラリと朋衆て折れむを築家、長嗣とその弟を修ふる事は殊しきり  
生年才考將勇爽の豪傑も裾肺の易と消る。又国人無よ袖をも濡るヲ極又  
鬼王道ニ弟ハ紀念の西とひてある城の里とち跡う途中うて早くも兄弟うか空を遂  
て兄弟の捕獲と同轄を免て状を垂拂す。又治りて隣のもの忙然とそ夏う琴  
と狂歌の空く皆の心も付さりしが池をば流めぬうと操造一続るふひととひそ勝り  
うがても空く身よ御をもて鬼王道ニ弟の船を乞てち野山に入り出處と兄弟の義理  
を吊ひて兄弟の身を定めのと覺ゆる。修て翌年お及き九弟被説は達み松根弟  
裕光と名、また青年十七岁母方の祖父桔野少佐とひ孫小笠翁裕耕とひ一考考氏  
伊東兄弟と改め後從兄経作が事務佐小界を委ら是が子孫小笠翁裕耕とひ一考考氏  
父と改めく成功あり。又子祐根基民が附られて代々領食よ給と云承お續せりま

# 元和詩

白帝城賦

工事さくが續つづくに伊東家いとうけの役わくを一いっのまほ處しよは御後附ごこうふと号たますものる孫まごも連綿れんめんして日向ひむかの國くに  
を賜たます彼かれ地じ小相續こあいりくてうるる又また虎とら山さんの猿さる成なり忘おとき死死去きょの後のちまづて御  
のあともちあくして老おちみほみほがよ誠まことの少すくない内うちくや家いえとみ昂のぞびる梶かじの山さん田た國くに  
使つかひせしといた虎とら山さん内うちて大おほ狹へばよスく不ふそ國展こくてん一いっ千余せんよ丈じょうを壽すゑを祝わうとぞ幼わい  
て富士野ふじのの見み月つきの幽ゆう硯す發はせぬとわく慶きよ年とを過はすと國展こくてん酒食しゅしょく極ごく下くだ  
とそ秋あき至いた勝名かつな義ぎ神じんと紫し多た林りん實じつを公こうを要いらる社願しゃがんを以も寄よ附つきあるを文ふみ書しょ高たか  
駿河國すひ富士郡ふじぐん 北山御厨きたやまごしょ并假宿卿ひがしゆきよ

右件鄉園者くわい為ため 賴朝沙汰らいざわ感祐成時致義勇ぎゆう所令永寄きよ附つき也べ  
全以不可有其効きゆう仍なお為ため後日沙汰さわ註文書しゆぶ以も與よ之牒て牒て如ご件じ

建久八年九月廿八日

源朝臣御判

是より毎年五月廿八日爲目とひちと、箱根はこね山さんの口くち社達しやつだつ立たて兄弟いりどの磐いは及およ太刀ただ  
等とう神体じんたいと崇たまむ兄弟いりどの磐いはの富士郡ふじぐん久次村くじそん象ぞうち小埋葬こまいそうて墓はあり

右件鄉園者為 賴朝沙汰感祐成時致義勇所令永寄附也  
全以不可有其妨テモトキ仍為後日沙汰註文書以與之牒如件  
建久八年九月廿八日 源朝臣御判

建炎八年九月廿二日

濟東口門禁

考案の神体と紫む兄弟の雅の翁士那久次村徳象ち小理萬て慕ゆ



